
東方仮面郷-after

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方仮面郷 - a f t e r

【Nコード】

N7045N

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

かつて、幻想郷で大きな異変が起きた。

その異変は仮面ライダーと幻想郷の住人が力を合わせ、多くの犠牲と引き換えに解決した。

そして、それから三年後・・・異変が再び起こる。

予告編

かつて幻想郷で大きな異変が起こった。

交わる事のない世界と繋がり、異形の怪人が攻めてきた。

幻想郷の住人はすぐさま怪人を退治しようとしたが、運悪く怪人に弾幕、特殊能力は効かなかった。

その危機に、仮面ライダー達は立ち上がった。

幻想郷の住人と協力し、見事に世界を救ったのだ。

そして、戦士達はそれぞれ自分達の世界へ帰っていった。

大切な人へ、思いを残して・・・

その異変から三年。

悪は、再び動き出そうとしていた。

「やはりライダーの力しか通用しないのか・・・」

「私は仮面ライダー・・・ジョーカー」

「アマダムも未だに完全復活しない・・・」

「あの二人に、ただ任せているだけなんて」

「これより、幻想郷を滅ぼす」

「私は駄目なんだよ・・・翔太郎がいなくて、普通の顔も忘れかけてんだよ！お前みたいに平気な顔して生きてくなんて出来ないんだよ！」

執筆決定！

残された切り札（前書き）

予告編の通り、独自の設定が多いのでご注意ください。

残された切り札

幻想郷の人里。

そこは平和そのものと言って良いほど治安は安定していた。

騒ぎを起こしたがる者があまりいないからだろうか。

しかし、今日は違っていた。

いや、今日も違っていたと言う方が正しい。

「うわああああああ！！」

「お父さん！お母さん！」

寺子屋から子供達が悲鳴を上げて走り去って行く。

生徒を逃がしていたのは、長い銀髪に変わった帽子を被った女性・
・上白沢慧音だった。

自分の教え子達の安全を守るため、子供達の誘導をしている。

そして、寺子屋の中から壁を突き破って数人の男達が出てきた。

スーツ姿に、顔は白と黒の骨のようになっているこいつらは、マスカ
レイド・ドーパントという。

マスカレイドは、慧音とその後ろにいる子供達に向かって揃って歩
いて行く。

「く……」

慧音は両手を広げ、子供達を隠す。

せめて子供達だけでも助けないと。

そう慧音が覚悟を決めた時、バイクの音がマスカレイドの後方から聞こえてきた。

全員が音の発生源を見ると、そこには一人の少女とバイクがあった。

そのバイクは黒と緑のカラーリングを施された、ハードボイルダー。

そして、そのバイクに乗っているのは、黒と白のエプロンのようなものを着た、金髪の少女……霧雨魔理沙だった。

魔理沙はバイクから下りると、ポケットから赤い機械を取り出した。

それを腹に当て、ベルトが腰に回り、魔理沙に装着される。

このベルトは、ロストドライバーという。

魔理沙は左手に黒いUSBメモリのような物を握りしめる。

「行け、アリス、翔太郎、フィリップ……」

そこまで言いかけて、魔理沙は一瞬動きを止めて、帽子を深く被る。

「……情けねーな。三年間同じ間違いの繰り返しなんてよ」

自嘲気味に苦笑いしつつ、魔理沙はメモリのスイッチを押す。

《JOKER》

メモリから電子音が流れ、魔理沙は黒いメモリ・・・ジョーカーメモリをロストドライバーに差し込む。

魔理沙が挿した黒いメモリはガイアメモリと呼ばれる地球の記憶を内蔵したメモリの中の切り札の記憶を秘めたジョーカーメモリである。

普通のメモリと違い、接続する端子が青色をしている。

これはT2メモリと呼ばれる次世代型ガイアメモリである。

7

魔理沙は右手をJの字をなぞるように動かしながら、体を左に向ける。

「変身」

魔理沙が左手を押し、ロストドライバーを傾ける。

《JOKER》

次の瞬間、魔理沙の体が黒い鎧に包まれた。

「何だお前は」

マスカレイドの一人が魔理沙に問い掛ける。

「私は仮面ライダー・・・ジョーカー」

ジョーカーはマスカレイドの群れに突っ込んで行く。

マスカレイド達も応戦しようと駆け出す。

「オラアツドリアツ」

ジョーカーはマスカレイドを殴り、脇から襲い掛かる敵を避けてキックで蹴り飛ばす。

二体の首を持ち、一体へと投げ飛ばす。

それを避けきれず、マスカレイドは地面を転がって行く。

マスカレイド達はジョーカーに群がって行くもののジョーカーは格闘で押し切って行く。

仮面ライダージョーカーのスペックは低いが、『技』の力が極限まで高められているため、魔理沙との適合率の高さと相まって、強力な力を発揮している。

「うおりゃっ！」

ジョーカーの拳がマスカレイドに命中し、地面を転がって行く。

しかし、いつの間にか地面にマスカレイドが固まって倒れていたため、マスカレイド達は体制を大きく崩す。

その隙にジョーカーはドライバーからジョーカーメモリーを引き抜き、右腰にあるメモリスロットに差し込む。

そして、スロットのスイッチを叩く。

《JOKER! MAXIMUM DRIVE!》

「…………ライダーキック!」

紫色の力がジョーカーの右足に集まり、ジョーカーはジャンプをして、マスカレイドの群れに跳び蹴りをぶち込む。

「ぐわあああああ!」

マスカレイドは悲鳴をあげ、爆発と同時にその姿は無くなった。

そして、マスカレイド達の体がマスカレイドメモリーに変わり、そのメモリーは砕かれた。

「やっぱりメモリーの暴走か」

ガイアメモリーは本来人が体に挿すか、ドライバーを使うことで使用、発動するものだが、ライダーの世界から幻想郷にくる際、メモリーが変質することがあるのだ。

魔理沙は変身を解き、ハードボイルダーに跨がる。

その時、慧音が魔理沙に駆け寄って来た。

「いつも済まないな。お前しか戦える者がいないというのが悲しいよ」

「別に構わねーさ」魔理沙は帽子を整えながら答える。

魔理沙は三年の間に成長し、背が伸びた。
もう慧音と変わらない程の身長だ。

「それに・・・」

魔理沙は帽子で顔を隠しつつ小さな声で呟く。

「これが、私とあいつとの約束で、絆だからな・・・」

魔理沙は手に持っているジョーカーメモリを握る。

「あ・・・」

慧音は事情を察し、どうしようかと迷ったが、その間に魔理沙はハードボイルダーで去ってしまった。

一人になった慧音は、重い溜め息を付く。

「私は・・・」

自分の夢を、追いつけているのだろうか・・・？

「巧・・・」

虚空（前書き）

大変遅くなりました。

最近仮面郷もS・shooterも停滞気味で申し訳ありません。

尚、これからますます独自の設定が増えるので、苦手な方は閲覧を御控え下さい。

それでは、どうぞ。

虚空

真昼の博麗神社で、一人の少女が空を飛び回っていた。

「・・・・・・・・」

紅白の巫女服を着た少女・・・博麗霊夢は上空で弾幕を放っていた。

霊夢の放つ弾幕は用意された的にそれぞれ命中し、全ての的が消滅する。

「はぁ・・・はぁ・・・」

霊夢は膝に手を付き、額の汗を拭った。

長時間の修行で疲れきっていたのだ。

その時、後ろから声が掛けられる。

「やってるねえー、霊夢」

声の主は神社の賽銭箱に座り込んでいた。

「すいか・・・」

霊夢は目の前にいる鬼の少女の名前を呼んだ。

「丁度良かったわ。これから体術の鍛練するから、付き合って欲し

いんだけど」

「なんだい、最近そればかりじゃないか」

すいかは露骨に嫌な表情を見せる。

霊夢はそれに目も向けず、一人縁側に歩いて行っ

た。昔とは違うのよ。・・・オリジナルともね」

「霊夢」

霊夢の言葉はすいかに遮られる。

「あんまりさあ、一人で思い悩むなよ。そりゃあ、あいつと別れて少しはシヨックだろうけど・・・」

そこまで喋った所で霊夢は手で制す。

「分かってるわよ・・・私はいつだって」

霊夢は右手の拳を握り、そして・・・

「笑顔よ」

親指を立てた状態で前に出した。

それを見てすいかはクスツと笑う。

「そうか、そりゃあ良かった」

「アンタは？」

「へ？」

「アンタは淋しくないの？」

霊夢がそう聞くと、すいかは笑いながら賽銭箱から飛び降りた。

「私にとっちゃあ気の合う飲み仲間が一人減っただけさ。それに・
・あいつは、響鬼はまた来るんじゃないかって思っんだ」

すいかは霊夢の横を通り過ぎ、階段の前で思いっきり背伸びをする。

「・・・そうね」

霊夢は顔を上に上げ、青空を見上げる。

ねえ、私はいつも自分らしくいるつもりよ・・・

アンタは今も冒険してるのかしら、そうでしょうけど。

お互い元気でいましょう。

雄介。

魔理沙はハードボイルダーを止め、バイクから降りると家に入った。

「帰ったぜ」

「お帰りなさい」

中ではアリスが椅子に座って本を持っていた。

魔理沙は近くの椅子に座る。

「・・・なあ、探偵事務所の看板、いつ下げるんだ」

「貴女が外したくないって言い出したのよ」

「・・・そうだった」

魔理沙は椅子から立ち上がると、被っていた帽子を脱いで壁に掛けた。

その帽子にはWIND SCALEのロゴがあった。

魔理沙は壁から自分がいつも被っていた黒の魔女帽子を手に取り、それを被る。

そして、2階に続く階段へ歩いた。

その途中、アリスが持っている本に気付く。

「・・・真つ白な本読んで、楽しいのか？」

「・・・白紙じゃないわ。ほら、最後に」

アリスは本の最後のページを開き、魔理沙に向ける。

『僕の好きな街をよろしく。

仮面ライダー 左翔太郎

君の相棒より』

本にはそんなメッセージが書かれていた。

魔理沙はそれを見ると、フツと笑み、二階へと階段を昇っていった。

アリスは開いていたページを戻し、ページの隅を見つめた。

そこには、小さな文字で短い文が書かれていた。

『アリス

ごめん

ありがとう』

「フィリップ・・・」

ポタ、ポタと雫が本に落ちる。

アリスは本をギュツと抱きしめ、唇を噛み締める。

それでも、涙が止まる気はしなかった。

魔理沙は廊下で足を止めた。

目の前には、以前住んでいた翔太郎の部屋の扉があった。

自分の手は勝手に動き、ドアノブを回し、魔理沙は部屋に入った。

部屋は当時のままにされており、多くの推理小説が本棚に並べられていた。

ふとベッドを見ると、二つのぬいぐるみが並んでいた。

片方は白黒の服に金髪。

もう一つは黒い帽子を被った男。

魔理沙と翔太郎のぬいぐるみだった。

左翔太郎。

フィリップと共に幻想郷に駆け付け、仮面ライダーダブルとして怪人と戦い、魔理沙とアリスをダブルにした張本人だ。

二つのぬいぐるみの後ろには写真立てが置かれてあった。

中の写真には四人の男女が写っていた。

魔理沙と翔太郎が前に出ようと押し合い、アリスとフィリップが後ろでクスクス笑っていた。

写真を見るだけであの日々の事は鮮明に蘇る。

短い間だったが、あの時が一番人らしく悩み、立ち直れたんじゃないだろうか。

自分の勝手な決断で家族をバラバラにして、帰らぬ人にした。ボロボロにした。

翔太郎はそんな魔理沙を拒絶せず、自分の過去も話してくれた。

自分の勝手な決断で大切な師匠を殺すことにしてしまった。

フィリップもアリスに話した。

自分が今まで何も決断しなかったせいで、多くのガイアメモリを作ってしまった。

アリスもたいして決断もせずに魔法使いになり、大きな志も無く自律人形制作にとりかかり、その結果が今のスランプで、それを誰にも相談出来ない環境を作ってしまったと。

そんな誰にも言いたくないはずのことを。話した。

そして、そんな自分達だからこそ、戦わなければならないと言った。

あの日を、ビギンスナイトを本気で償わなければならないと。

それから、私は変わった。

母は帰って来ないけれど、他人に迷惑は掛けなくなっただけ。

寂しさを紛らわすために続けていた強盗紛いも今ではすっかり辞めてしまった。

アリスも完成した自律人形をフィリップに渡す事が出来た。

そんな翔太郎に。

魔理沙は惹かれているのを自覚していた。

そんな表立って気持ちを出すことは出来なかったが、少なくとも二人でドタバタしていた時は互いに嬉しかった。

そんな幸せが続かないことは分かっていた。

仮面ライダーが来たのはこの世界を救うためで、それが終われば自分の世界に帰るのは当たり前だった。

分かっていた。

それでも、少しは強くなれたから平気だと言いつけた。

「結構、堪えてきたんだけどな・・・」

独り言が零れる。

思い出してしまうのはあの頃のこと。

私、アリス、翔太郎、フィリップ、照井、亜樹子。

皆一つの事務所で騒いでたっけ。

私と翔太郎がいがみ合って、亜樹子がスリッパで叩いて、アリスとフィリップが苦笑いしながら仲裁して、照井がコーヒー煎れながらそれを見てて・・・

暖かい物が頬を薫って行く。

ぽつ、ぽつ、と床に落ちては辺りを濡らす。

泣いて、いるのか。

結局、自分は泣いているのか。

気付いた時は既に遅すぎて

「ひつ・・・くつ・・・う・・・う・・・翔太郎・・・」

どれくらい泣いたのかは分からない。

ただ、アリスが夕飯を持って来なかったら、私はずっと泣いていた気がする。

静寂／運命の中で（前書き）

大変遅くなりました・・・（汗

では本編をどうぞ。

静寂／運命の中で

今日は涼しいというよりは、若干の寒さを覚える日和だった。

魔理沙は箒に乗って空を飛んでいた。

普段はハードボイルダーで移動するのだが、これから行く場所は空を飛べる方が便利だ。

ハードスブラッシャーがあれば問題無いが、リボルギャリーはこちらには無い。

魔理沙は目的地を見つけると、更にスピードを上げた。

そこは、外装が紅に染まった西洋風の館・・・紅魔館だった。

「よう、美鈴」

魔理沙は箒から降りると、緑色の服を着た門番に話し掛けた。

「ああ、魔理沙ですか。どうぞ」

魔理沙は軽く挨拶すると、スッと敷地に入る。

そういえば昔は弾幕張りながら無理矢理突入してたなー、と思います。

あの強盗紛いがよく丸くなったもんだ。と自嘲気味に笑う。

長い廊下を歩き、とある場所へ向かう。

「よう、パチュリー」

「・・・ええ」

光の無い書斎に、紫色の髪をした少女が本を読んでいた。

パチュリーは本から視線を魔理沙に一瞬移し、また本を読み始める。

「本、返しに来たぜ」

「・・・こあ」

パチュリーが呟くと、赤い髪の少女、小悪魔がパタパタと走って来る。

「本、元の場所に返しておいて」

パチュリーが指示すると、小悪魔は魔理沙から本を受け取り、奥に入って行った。

魔理沙はパチュリーの向かい側に座り、肘を付く。

パチュリーが、本を読みつつ魔理沙に話しかける。

「貴女が本をまともに返すなんて、最近は何日なのかしら」

「おいおい、私は三年前からちゃんと返してるぜ」

「私にとって三年なんて最近よ」

「ああそうかい」

魔理沙は紅茶を飲み終わると、箒を持ってさっさと出ていく。

「今日は本、借りないの？」

パチュリーが尋ねる。

「あー、今日はいいや。またな」

魔理沙は適当に答え、扉を開けて出ていった。

「本に執着心が無くなるなんてな・・・私も歳かな」

一人で笑っていると、何処からか音が聞こえて来る。

「・・・バイオリン？」

音の正体はバイオリンの穏やかな音だった。

魔理沙は誘われるように音に向かって進んで行った。

「この部屋か・・・」

魔理沙は音の根源である部屋の扉まで来ていた。

そこは見覚えのある場所だった。

「レミリアの部屋じゃねーか」

そこは運命を操る吸血鬼、レミリア・スカーレットの部屋だった。

多少嫌な気はしたが、好奇心は抑えられず、ドアノブをゆっくりと回し、中に入って行った。

そして、部屋の中を見渡す。すると・・・

「・・・・・・・・・・」

レミリア・スカーレットは窓際に立ち、バイオリンを弾いていた。

部屋のカーテンは全て閉められ、日光は一切入っていない。部屋の明かりもつけていないので、薄暗い暗闇が広がっていた。

もつとも、昼間なのでカーテンに阻まれている日光が少しだけ明るさを注いでくれるのだが。

レミリアの演奏は、時すらも穏やかにしているようだった。

一つ一つの音が聞く者の心に響く様に広がり、それは誰であろうと魅了する美しさを持つ。

ただ、魔理沙はその演奏に何処か虚しさや寂しさを感じた。

その時、レミリアの演奏がピタツと止まり、レミリアは演奏を止めて魔理沙に向かって行く。

「レディーの部屋に入る時は、ノックをするものよ」

レミリアは手に持っていたバイオリンを抱き抱えるようにする。

「私はちゃんとノックしたぜ」

本当は覚えていないのだが、ごまかすことにしよう。

「聞こえなかったけど、まあ良いわ。ゆっくりして行きなさいな」

「いや、もう帰るところだぜ」

レミリアは魔理沙に背を向けると再びバイオリンを弾き始める。

ただ、さっきと違い気軽に弾いているのか、音に命が宿っていない気がした。

同じ曲を演奏しているはずなのに、どうしてここまで違うのか。

それはレミリアと彼女に音楽を教えた奴だけが分かることなんだろうか。

そんな魔理沙の心境を察してか、レミリアはバイオリンを弾きながら話し出した。

「これは私が貴女と会話をするための曲よ」

「は？」

魔理沙は訳が分からないといった表情を浮かべる。

「喫茶店のBGMと同じ。誰に聴かせたいのか。その思いが弱いからたいして感動もできないのよ」

「おいおい、私には紅渡への曲みたいなのないのかよ」

「渡への曲は渡と私だけのものよ貴女に聞く資格はないわ。」

「一生ね」

魔理沙はその後部屋を出て行った。

私の物言いにカチンときたようだったが、特に何も言わなかった。

・・・少し言い過ぎただろうか。

「お姉様、動揺し過ぎだったんじゃないの？」

不意に背後から声が聞こえる。

後ろを振り向くと、そこには妹のフランドールがいた。

金髪のサイドポニーをフラフラと揺らしながら近付いて来る。

「魔理沙は気付いて無かったみたいだけど、私には丸分かりだったよ。渡の名前が出て来た瞬間、お姉様ギクツとしてたでしょ」

「・・・そういう貴女は？貴女、随分太牙を気に入ってたようだけど」

レミリアはフランに問い掛ける。

「んー。私はお姉様のと違うから。何と言つか・・・咲夜とも違って、なんか家族が増えた気がしたから」

そう、と短く返事をする、レミリアはまたバイオリンを弾き始めた。

渡・・・貴方に会いたいけれど、私は平気よ。

だって、貴方の音楽は私に残ってるもの。

それだけで、立っていられるわ。

レミリアは日が沈むを感じながら、そう思った。

夢のかけら（前書き）

大変遅くなってしまいました。

今回、説明回となっておりますが、自分でも分かりにくい事になってしまいました。

大体で理解して頂くと幸いです。

夢のかげら

ある日の人里。

時はもう昼を過ぎ、怪人が現れることなく平穏な時間が流れていた。

上白沢慧音は里の中を歩いていた。

寺子屋も昼休みで、慧音は昼ご飯を取りに家へ帰る所だった。

まさか自分が弁当を忘れるとは思ってもみなかった。

そうやって歩いているうちに、見慣れた顔を見掛けた。

「輝夜、どうしたんだ？」

そこにいたのは不死の蓬莱人、蓬莱山輝夜だった。

長い黒髪はサラサラと揺れ、姫の風格を表しているかのようなだった。

「薬を売りに来たのよ。何せ人手が足りないから」

「・・・すまない」

慧音は頭を下げた。

今のは失言だった。

「別に謝る必要はないわよ。・・・そう、全部私の責任だもの」

輝夜は視線を落とし、目を閉じた。

慧音には分かっていた。

彼女は先の戦いで、あまりにも多くの物を失った。

戦いの中、私達は敵から私達がパラレルワールドの存在だということとを教えられた。

オリジナルから派生して生まれた存在。

それは生まれた時からオリジナルの設定、容姿、記憶などを押し付けられた様なものだ。

私達はそれでも屈しなかった。

例え押し付けられた物でも、自分は自分だと分かったから。

ただ、全員が堪えられた訳ではなかった。

中には、己の存在、オリジナルを憎んだ者もいた。

それは責められるものではない。

誰でも、嫌な役割を押し付けられたとなれば、嫌になるだろう。

八意永琳と藤原妹紅がそうだった。

妹紅は元々蓬莱人になったことを後悔している面があったし、八意永琳も常に主に仕える日々嫌気がさした。

そうやってオリジナルと違う思考が出来ることが、皮肉にもパレルの証なのかもしれない。

そして、二人は幻想郷を裏切り、敵組織『ネオショッカー』の力と共に輝夜に襲い掛かった。

輝夜は二人と戦い、退けた。

同時に、二人を殺してしまった。

蓬莱人の不死の能力も、ライダーや怪人の力には効果がない。

これは蓬莱人に限った話ではない。

この幻想郷に住む者全員に当て嵌まる事である。

銀河が、多くの星が集まって出来るように、世界も多くのパレルワールドやオリジナルの世界が集まって成り立っている。

そして、力の基準、大きさというものは各世界ごとに違う。

簡単にいえば、蜜柑を持ち上げるのが精一杯の人がいたとして、他

の世界に行けば家を持ち上げることが可能なのだ。

このように他の世界に対して不利な状態にあることが幻想郷にはよくある。

ライダーが言うには、この世界は博麗大結界に覆われているため、世界の流れに取り残されているからだそうだ。

簡単に言えば、紙に火を点けるようなものだ。

世界の集まりを一枚の紙として、力の発生源を火とする。

新しい世界が生まれたり、強力な力が現れると、火が紙に燃え移るように、世界中にパワーアップするような波動が行き渡る。

しかし、幻想郷は博麗大結界という壁で囲まれているため、それが届かずに世界中から取り残されてしまうようなのだ。

あまりにも突飛な話で、最初は理解出来なかったが今となってはどうでもいいかもしれない。

もう戦いは終わったのだから。

輝夜に視線を戻すと、その顔は空を見つめていた。その顔は空を見つめていた。

「そう、全部私の責任よ」

輝夜はそつと口を開いた。

「私が二人を殺したようなものだもの。私が最低な女だったってことよ」

「・・・それは、」

慧音は否定しようとする、しかし、輝夜は再び口を開いた。

「誰かを失うことには慣れてるわよ。今回はそれが私の親しい人だっただけ」

「・・・つらくはないのか？」

慧音は問い掛けた。

永遠に生きる蓬莱人。

それは永遠に誰かを失い続ける事と同義である。

「私は構わないわ」

輝夜は、ハッキリと告げた。

「失い続ける事が私の運命だと言つなら、私は運命と戦う。そして勝つてみせる」

かつて、剣崎が言つたように、輝夜は迷い無く告げた。

「・・・強いな、お前は」

慧音は思わずそんな言葉を漏らした。

そんな時、二人に声が掛けられた。

「・・・しばらくね」

慧音が振り向くとそこには青い長髪に桃の飾りが付いた帽子を被つた少女、比那名居天子が立っていた。

「珍しいわね、天人がわざわざ地上に来るなんて・・・もしかして異変でも起こしに来た？」

「違うわよ。ちょっと・・・コーヒー豆が切れたから買い出しに来ただけ」

輝夜の問いに天子はバツが悪そうに答えた。

慧音は不審に思い、天子に聞き返した。

「わざわざ自分で買いにきたのか？誰かに買いに行かせたら良いのに」

それを聞かれると、天子はワシャワシャと頭を掻き、そっぽを向いた。

「・・・良太郎のコーヒーは、私じゃないと作れないの」

「・・・」

慧音は納得した。

早く野上良太郎のいれるコーヒーに近い物が飲みたいが、豆が無くなってしまった。

だから急いで買いに来たのか。

「と、とにかく！私はもう帰るわ」

そう言うのと、天子はさっさと飛んで帰ってしまった。

「じゃあ、私も帰るわね」

天子が帰ると、同じく輝夜も帰って行ってしまった。

二人が帰り、一人になった慧音は、空を見上げた。

皆、どこか寂しくも、平和な日常を送っている。

私も、自分の夢を叶えなければいけないな。

かつての約束を、思い返す。

「世界中の洗濯物が真っ白になるように、皆が幸せになりますように」

慧音はそつと口を開いた。

幻想郷とは離れた、別世界。

そこは現代的な町並みが広がり、電車の音が周囲に響き渡っていた。

早朝なのか、人の気配は殆どない。

そんな中、二人の男女がベンチに腰掛けていた。

「そっちはどうだい、ベリー君」

男が隣の女性に話し掛ける。

「何かがおかしいのは分かるけど、原因はハッキリしないわ」
女の方がそう答えた。

男の名は海東大樹。

世界中のお宝を集める男だ。

もう一人はマエリベリー・ハーン。
金髪の髪が特徴である。

「士はまだ来ないのか？」

「まだ来てないわね」

マエリベリーは携帯をいじりながら答える。

「ここ最近の異常・・・やっぱりショッカーが絡んでるのかな」

「それは分からないけど・・・」

マエリベリーは溜め息をつき、携帯をボタンと閉じる。

海東はベンチから立ち上がった。

「宇佐見君にも連絡つかないのかい？」

「ええ、多分世界の境界にでもいるんでしょうけど・・・」

その時、二人の傍に銀色の光が歪んだようなオーロラが現れる。

そして、一人の女性がそのオーロラの中から出て来る。

「海東、メリー、なんか収穫あった？」

オーロラから出てきた人物は二人を見回し、そう尋ねた。

「いや、全然なかったよ」

「そっちはどうだったの？蓮子」

マエリベリーはオーロラから出てきた人物、宇佐見蓮子に聞き返した。

メリーというのは、蓮子がメリーに使うあだ名である。

「まいったわねー、敵の正体は掴めないし、何より……」

「橋が不安定になったお陰で、あの幻想郷に関われなくなったしな」

蓮子の後ろから銀色のオーロラが現れ、そこから一人の男が出て来る。

男の首にはマゼンタカラーのカメラが吊されている。

「で、実際問題どうするつもりよ、士」

蓮子は自分の被っている帽子を整えながら、この男……門矢士^{かどやつかさ}に話し掛けた。

士は数秒考えた後、口を開いた。

「とにかく、あの幻想郷に繋がる橋を作りながら、他のライダーの協力を仰ぐしかないだろ」

士は話しながら三人に向かって歩いて行く。

そして、三人は何も言わずに士に付いて行く。

蓮子は帽子を被り直し、目の前に作り出された銀色のオーロラを見つめる。

「じゃあ、行きますか」

「ああ」

蓮子に士が答え、海東とメリーも頷く。

そして、四人がオーロラに入ると、オーロラは消え、そこには誰もいなくなつた。

何事も無かつたかのように、風がその場を通り過ぎて行く。

過ぎて行く時間

冥界、そこは死者の魂が導かれる場所。

そんな所に、白玉楼はあった。

その一帯は静寂に包まれ、騒音などは一切無かった。

妖夢は庭を箒で掃いていた。

庭の手入れも終え、ゴミを捨てるのみとなっていた。

「ここも、よく廃墟にならずに済んだな・・・」

妖夢は縁側に腰掛け、箒を近くに置いた。

あの戦いから三年・・・それは私にとっても、白玉楼にとっても、主を失って三年経ったことを意味する。

幽々子様は仮面ライダースカルとして戦って下さっていた。

しかし、幽々子様はネオショッカー側の圧倒的有利な戦況から幻想郷を見限った。

「・・・はあ」

結果的に私が引導を渡す羽目になってしまった。

赤の他人にはして欲しく無かったが、自分の主を討ったことは私の中で何処か悶々としたものを残している。

「貴方のせいですよ・・・翔一さん」

頭の中で居候だった人の事を思い出す。

今となつては、あの人の影響で庭の六割が畑と化している。

育てたのは自分だが、此処まで広がるとやり過ぎな気がした。

「・・・ねえ」

「はい？」

妖夢が振り返ると、そこには一人のメイドが立っていた。

「咲夜さん！？」

「そんな化け物を見たような反応しないで欲しいわね」

咲夜は呆れたようにため息をつく。

「はい、これ」

咲夜から紙袋を受け取り、妖夢は尋ねた。

「これ、なんですか？」

「手土産よ。人里で適当に買った物だから遠慮なくていいわよ」

「ありがとうございます。それで、何の御用ですか？」

「暇だから来ただけよ」

「・・・いいんですか？」

妖夢は苦笑した。

メイドが勝手に出歩いていいんだろうか。

「心配しなくても、今は休憩時間よ」

それでもどうかと思ったが、深く言及しないことにした。

二人で庭を眺める。

綺麗に掃除されたそれは見た者の心を落ち着かせる。

「咲夜さん」

口から声が漏れる。

「どうして、幽々子様はあんなったんでしょうか」

「さあ？」

「いえ、あの方が見当違いなどありえません。むしろ、何故私達は勝てたのでしょうか？」

「私達が勝ったからよ」

咲夜は短くも、そう答えた。

「幽々子は自分の目に映った戦況を信じた。私達は私達の目に映った世界を信じた」

「・・・何処が違うんですか？」

妖夢は尋ねた。

「私達は、きっと、自分のことしか基本的に考えていない」

咲夜は続ける。

「でもそれは幻想。私達はパラレルだから、自分の事を考えているつもりで、自身のキャラクターを演じているだけ」

「だからこそ、その事実気が付いた時、差ができたのよ」

「差・・・」

「幽々子は私達を見ているつもりで、本当の自分達を知らなかった。だから戦況を見誤ったのよ」

幽々子はきつと、皆がどんなことを、どれ程の思いなのか、分からなかったであろう。

それは、恐らく自分達でも分からなかったはず。

だからこそ、私達は最後まで戦い、勝ったのだろう。

咲夜はそう思っていた。

「パラレルであることを考え、自分らしくあれただとかの違い、ということですか」

突然、第三者の声加わる。

咲夜と妖夢が振り返ると、そこにはカメラを持った鴉天狗の少女が

いた。

「いやはや、咲夜さんも良いこと言うようになりましたねえ」

「文さんじゃないですか」

妖夢が驚くと、射命丸文はカメラを降ろした。

「どうも、【文々龍。新聞】の射命丸文です」

「そうは言っけど、その新聞、一回しか見てないんだけど」

咲夜がそう言うと、文はバツが悪そうな顔をした。

「仕方がないじゃないですか、良いネタが無いんですから」

「だからって、三年間に一度も記事を出さないのはどうかと思いますけど・・・」

妖夢が苦笑いすると、文はため息をつく。

「分かってはいるんですが・・・真司さんがいないと、今一文々龍新聞を作っている気にならないんですよ」

「あら、貴女でも寂しがることがあるのね」

咲夜がクスクス笑うと、文はムスツと顔をしかめる。

「誰かさんの言いなりの御身分の人に、感情がどうのこうのと言われたくありません」

文は拗ねたようにそっぽを向く。

「あら、言いなりとは失礼ね」

咲夜は笑みを含めたまま口を開く。

「私はお嬢様に一生仕えると決めているけど、何をするかは自分で決めるわ」

「誰かのためでも、自分だけの人生を生きて行く。それが・・・」

「天の道」

咲夜人差し指を立てた右手を上に掲げる。

その姿は、太陽のような輝きを辺りにもたらすかのようだった。

「天の、道・・・」

「何感心してるんですか、妖夢さん。あんなの嘘っぱちですよ」

文はやれやれといったふうに肩を竦める。

「で、貴女、これからどうするの？記事なんて出来るの？」

帰り際に咲夜は文に尋ねた。

文は少し考えた後、答えた。

「まあ、私のやりたいようにやらせて貰いますよ。それが、私の願いですから」

文はそう言つと、空に向かって飛び去つて行つた。

文自身のスピードと相まって、あっという間に姿が見えなくなった。

「じゃあ、また合いましょう」

咲夜もその後帰つてしまい、妖夢は一人になった。

妖夢は箒を片付けに行く。

翔一さん。

貴方は言ってくれましたよね。生きることとおいしいと。

皆、寂しくはありますが、自分なりに前を向こうとしています。

私は半分死んでいますが、それでも生きることが美味しいと言えるように頑張ります。

見ていて下さい。

妖夢は、心の中でそう誓った。

世界の何処でも無い空間。

そこに何かがいた。

「・・・・・・・・蘇れ」

すると、かけらのような物が続々と集まって行く。

「俺様の・・・・糧・・に・・・・・・・・」

謎の声は、辺りに響き渡る。

過ぎて行く時間（後書き）

一応、これで主役ライダーが何処にいたのか、の紹介は終わりです。

次回から本筋に入ります。

では、また次回で。

大ネオショッカー

日が昇り、まだ寒さは残っているものの暖かい日差しを感じる朝。

守矢諏訪子は鳥居に座り、ボーッとしていた。

暇であつたし、あの時以来こうやって何も考えずにいることが増えた。

三年前、八坂神奈子と東風谷早苗は幻想郷を裏切り、ネオショッカーに味方した。

その時に付けられた胸の傷は完全に治さなideいた。

忘れることは許されない。
そんな気がしていたのだ。

何度目か分からない溜め息を付き、諏訪子は鳥居から飛び降り、地面に着地する。

今でも二人の最期は目に焼き付いている。

率先してショッカーに入ったのは神奈子だが、力に魅せられたのは早苗だった。

敗北した神奈子からサイガフォンを奪い取り、大ネオショッカーに改造されたデルタギアを使用した。

デルタ、カイザ、サイガ、オーガの力を同時に発動するライダー、
デイガに早苗はなったが、博麗の巫女、仮面ライダークウガがそれ
を破った。

あの二人が最期に後悔したのか、それとも自分の思うがままに生き
たのか。

それは分からない。

そして、中に戻ろうと振り返った瞬間、

「キュルルゴゴゴゴ」

ワーム（サナギ体）が立っていた。

「!？」

諏訪子は瞬時に飛びのき、距離を置く。

ワームはサナギ体と成虫体に分別され、成虫体になると、クロック
アップを発動し、感知出来ない速度で動いているかのようになる。

今はライダーの世界と幻想郷の繋がりが薄くなっているため、強い
力を持つ成虫ワームが現れる事はない。

しかし、諏訪子にとって、サナギ体といっても脅威であることに変
わりはない。

弾幕や本来の力が効かない怪人達は、例え雑魚といっても幻想郷の住人にとって、天敵なのである。

諏訪子はジリジリと後退りする。

このままでは・・・

そう思った時、

何処からかバイクの音が聞こえてきた。

次の瞬間、神社に続く階段から、トライチェイサー20000が飛び出して来た。

「博麗の巫女！」

諏訪子はバイクから降りた少女に驚いた。

「間に合っ たみたいね」

霊夢は諏訪子の近くにまで歩み寄る。

霊夢は三年前の事件以来、怪人への対応も仕事としていた。

妖怪の山に怪物が向かっていると聞き、駆け付けて来たのだ。

「悪いね・・・頼んだよ」

「任せて」

霊夢は両手を臍の辺りに合わせる。

すると、霊夢の腰に古代のベルト・・・アークルが出現する。

左手を左から右へと動かしつつ、右手を右へとスライドする。

「変身！」

そして、右手を左に突きだし、左手をベルトに沿える。

最後に、突き出した右手を左手の上に置き、グッと下に押す。

霊夢が両手を広げると体が徐々に変化し、その体は完全に変わる。

白い体をした、クワガタの戦士・・・仮面ライダークウガ、グロウイングフォーム。

霊夢は三年前の異変でアマダムにダメージを負い、クウガへの変身に制限を受けていた。

そのため、グロウイングフォーム以外の変身が出来ない。

「はあっ！」

クウガはワームに殴り掛かり、ワームはダメージを受けて怯む。

すかさずパンチをワームに繰り出し、追い詰めていく。

そして、ワームを思いつ切り蹴り飛ばす。

その時、何者かがクウガに後ろから襲い掛かる。

「何!？」

背後から掴まれたまま首を後ろに向ける。

そこには、やせ細ったミイラのような姿をした怪人がいた。

霊夢達が知る由もないが、これはクズヤミーと呼ばれる怪人だ。

クウガはクズヤミーを振り払い、思いつ切り殴り飛ばす。

殴られたクズヤミーは消滅した。

その時、ワームがクウガの首を掴み、上に持ち上げた。

「あ．．．ぐ．．．」

ワームの力は思ったよりも強く、クウガは意識が遠くなる。

《JOKER! MAXIMUM DRIVE!》

横から仮面ライダージョーカーが飛び蹴りで割り込んで来る。

ワームは勢いよく吹っ飛び、地面を転がり回る。

「よお霊夢。待たせたな」

「遅いわよ」

二人が安心した時、ワームの様子がおかしくなった。

体の色が赤く変色し始めたのだ。

「まさか、脱皮するつもり・・・?」

「霊夢! 押さえ付けろ!」

ジョーカーはそう言いながらメモリを握る。

クウガは急いでワームに駆け寄り、ワームを後ろから羽交い締めで動きを止める。

《JOKER! MAXIMUM DRIVE!》

ジョーカーは右手に力を溜め、ワームに飛び掛かる。

「ライダーパンチ・・・」

ワームの体が脱皮する・・・直前で。

「おりゃあああああ!!」

ジョーカーの拳がワームに叩き込まれ、ワームは爆散した。

「・・・・・・・・」

クウガとジョーカーは変身を解除し、霊夢と魔理沙に戻った。

「あのワーム、成虫になろうとした・・・」

霊夢は顔を俯かせて考え込んだ。

この幻想郷はライダーの世界の影響が若干残っているだけで、雑魚怪人が時たま発生するだけであつた。

そのため、成虫ワームが現れるはずがなかったのだが、今さっきのワームは脱皮しようとした。

「・・・幻想郷に、何が起こってるんだ」

魔理沙が呟いた時、二人の前に銀色のオーロラが出現した。

そして、オーロラの中から不適な声が響き渡る。

「フッフッフッ」

重い、こころ

「フッフッフッ」

オーロラの中から不適な声が響き渡る。

霊夢と魔理沙、そして諏訪子とそのオーロラを見ていると、中から何者かが現れた。

「久しぶりだな、博麗の巫女。それに魔法使い」

「あ・・・アポロガイスト!？」

オーロラの中から出て来たのは白いスーツを着た中年の男性・・・その正体は、かつてライダーの世界で最大に迷惑な行為を繰り返した大ショッカーの幹部である。

「何で・・・お前は、ディエンドとマエリベリーが倒したはずだ・・・」

「はっはっはっ」

アポロガイストは魔理沙の言葉を聞いて笑い出した。

そして、一通り笑い終わると、話し出した。

「確かに我々ネオショッカーはお前達によって壊滅させられた」

「しかーし！今、フェザー様のお力で、ネオショッカーは大ネオシヨッカーとして生まれ変わったのだ！！」

アポロガイストの言葉に霊夢達は衝撃を受けた。

「大・・・ネオシヨッカー」

「そつだ！今は橋を繋いでいる途中なせいで、多くの幹部を呼ぶことは出来ないが、近い内に侵略が始まるだろう！」

「そんな事・・・」

「させるか！」

「「変身！！」」

霊夢と魔理沙は同時に変身し、クウガとジョーカーになる。

「無駄だ」

アポロガイストは人間体から怪人に戻り、右手に持っている銃を発射する。

それはクウガとジョーカーに命中し、二人は後ろに吹っ飛ばされる。

「く……そお……」

変身は強制解除され、二人は地面に倒れる。

「そう焦るな、お前達を倒すのはまた後だ。では、また迷惑させてやるのだ」

アポロガイストはオーロラの中に入り、姿を消した。

霊夢達はそれを黙って見ることに出来なかった。

その日の晩、霊夢は博麗神社の賽銭箱に座り、新聞を読んでいた。

それには、今日の出来事が記事になっていた。

あれ程の異変がまた起きるかもしれないとしたら、皆、焦らずには
いられないのだろう。

「仮面異変が再び、か……」

新聞を置き、ふと境内を見る。

すると、雨が降る中、魔理沙が立っていた。

服や体が濡れるのも気にせず、そこに立ち尽くしている。

「・・・何してんのよ。そんな所で」

霊夢が声を掛けても魔理沙はぴくりとも反応しない。

霊夢は呆れたような顔を見ると、寶錢箱から降りて魔理沙に近寄る。

「まあ、アンタは見た目の割に以外と落ち込みやすいからね」

「・・・」

「まあ、これから危なくなるし、戦況はかなり不利だけど、何とか」

そう言っつて、霊夢が魔理沙の肩を叩いた瞬間、魔理沙は霊夢の手を叩き落とす。

霊夢は思わず呆然としていたが、やがて顔をしかめて魔理沙を睨む。

「・・・何？」

「・・・んで」

魔理沙は小さな声で何かを言った。

霊夢が何か聞こうとしたが、その時魔理沙が大きな声で怒鳴った。

「何で・・・何でお前は平気な顔してんだよ！また、また、またあんなことが起こるっていうのに！お前は！何で！！」

魔理沙の剣幕に霊夢はたじろぎもせず、自分の肩を掴んでいた魔理沙の手を振りほどく。

「ったく・・・アンタが何考えてるのか知らないけど、私に当たらないでよね」

「・・・・・・・・」

「確かにそれまでの異変とは違った異変だったけど、だからってそんな取り乱したって意味ないでしょ。落ち着いていつも通りに・・・」

「無理だよ」

魔理沙は呟いた。

そして、また霊夢の両肩を掴み、叫んだ。

「無理だよ、私は、お前とは違う・・・あの時、翔太郎が帰ってから！いつも通りなんて出来ないんだ！いつもの顔なんて出来ねーんだよ！！」

霊夢は魔理沙の頬を思い切り叩いた。

バチンと乾いた音が辺りに響き渡る。

「左翔太郎は、あんたがそうやって泣きわめくのを望んでないですよ」

「っ！」

魔理沙はキッと霊夢を睨みつける。

「お前に・・・」

「お前に私達の何が分かるんだよ！」

魔理沙は箒に乗って飛び去って行った。

一人残された霊夢はその場から動こうとはしなかった。

「分かるわけ・・・ないじゃない」

霊夢は顔を空に向ける。

雨粒が顔に叩き付けられる。

「私に・・・恋してるアンの気持ち分かるわけないじゃない」

明日、何かが起こる。

そんな予感を感じさせながら、長い夜は深まって行く。

現れる破壊者達

とある空間、

実際には、大ネオショッカーの首領がいる空間。

そこで、何人かの幹部と首領が会話をしていた。

幹部達の名前はアポロガイスト、ケルベロス？、グリラスワーム。

誰もが、強力な力を持つ怪人だ。

「世界の橋はまだ繋がらないのか？」

ケルベロス？は首領・・・フェザーに聞いた。

「ああ、俺はまだ生まれて間もないからな。世界への干渉の仕方が今一掴めないんだ」

フェザーは自分の力を確かめるかのように拳を握り締めた。

フェザーの外見はまるで気高い鳥が人の姿をしているかのようにだった。

まるでショッカーマークが生き物として現れたかのような姿をしていた。

「幻想郷への侵略は一体いつ開始するのだ？」

アポロガイストが待ちきれない様子で尋ねた。

フェザーは、それを宥めるようにアポロガイストを抑えた。

「暫く待つてくれ。まだ部下も俺自信の力も足りないんだ」

それを聞いて、アポロガイストは残念そうに肩を落とした。

すると、フェザーはその場から立ち去った。

幹部三人も、その場を離れて行った。

・・・今までの会話を、盗み聞きしている者がいた。

「全く、弱気だな」

鎌田。仮面ライダーアビス、また、パラドキサアンデットでもある。

鎌田は幻想郷侵略を先延ばしにするのに賛同しかねていた。

「あそこにはまともなライダーはいない。攻めるなら今がチャンスだというのに」

鎌田は指をパチンとならした。

そこに二体の怪人が現れた。

一体は、鳥の怪人バードドーパント。

そしてもう一体、オウムヤミー。

二人の怪人を連れ、鎌田はオーロラの中へ姿を消した。

幻想郷の人里。

そこで霊夢と魔理沙は並んで歩いていた。

次に敵が攻めて来るとしたら、人の多い人里を狙う可能性が高いと思っただからだ。

だから、二人で見回りをしているのだった。

（気まずい・・・）

魔理沙は内心後悔していた。

昨日はつい感情的になってしまったが、翌日落ち着いて考えてみるとあれはどうみても八つ当たりだった。

翔太郎がいなくて、アリスも元気がなくて、溜まっていたストレスが爆発してしまった。

霊夢にしてみれば溜まったもんじゃないだろう。

どうしようか考えていると、霊夢が見かねて声を掛けた。

「昨日のことなら気にしないで」

「ああ。・・・でも」

「アンタのヒステリーなんて三年前に見飽きたわよ」

「どういう意味だコラ」

魔理沙は霊夢の肩を軽く小突いた。

確かに三年前も色々あったがそれにしても納得いかない。

魔理沙は辺りを見渡した。

人里にはいつも賑やかな住人達で溢れていたが、今は人通りも少ない。

昨日の記事を読んで、外出を控えているのだろう。

無理もない。

前回の異変は余りにも多くの傷を残してしまったのだから。

その時、霊夢達の前に銀色のオーロラが現れた。

「!？」

咄嗟に二人は身構えた。

そして、中から一人の怪人が現れた。

オウムヤミーだ。

霊夢と魔理沙は同時に変身する。

「変身!!」

クウガとジョーカーはオウムヤミーに飛び掛かる。

オウムヤミーは空へと飛翔し、二人の攻撃を回避する。

そして、口から炎を吐き出し、二人の体に命中する。

二人の体は火花を散らしながら大きく吹き飛ぶ。

起き上がった所で、二人の体はオウムヤミーの吹き出す炎に包まれた。

「ぐああああ!!」

ジョーカーは何とか炎から抜け出し、オウムヤミーに接近する。

オウムヤミーは炎を止め、ジョーカーのパンチを受け止める。

そのまま格闘戦に纏れ込むが、ジョーカーはさっきのダメージが効いているのか動きが鈍い。

オウムヤミーの蹴りがジョーカーの腹に決まり、大きく吹っ飛ばされる。

クウガもようやく立ち上がり、ジョーカーを助け起こす。

その時、オウムヤミーの背後に銀色のオーロラが出現した。

その中から鎌田とバードドーパントが出て来た。

「お前・・・ネオショッカーの・・・」

「そう！今や大ネオショッカーの幹部。そして、この世界を侵略する者だ！」

鎌田はポケットからカードデッキを取り出し、腰に現れたバックルにはめ込む。

「変身」

鎌田の体は水色の鎧に包まれた。

鯨のモンスターの力を持つライダー、仮面ライダーアビス。

アビスが合図すると、オウムヤミーとバードドーパントはクウガと

ジョーカーに襲い掛かった。

二人とも応戦するが、相手は自由に空を飛べるうえ、遠距離攻撃が出来る。

思うように戦えず、二人は追い込まれて行く。

次第に怪人の攻撃だけが当たるようになった。

「こ・・・の・・・」

ジョーカーはオウムヤミに殴り掛かろうとするが、オウムヤミの口から炎弾が発射され、ジョーカーの体を吹き飛ばす。

「魔理沙！」

クウガはジョーカーに駆け寄る。

《STRIKE VENT》

アビスはカードを使い、腕を武装する。

そしてその腕から強力な水流を発射する。

クウガとジョーカーは水流に飲まれ、壁に叩きつけられる。

「がはっ・・・」

強制変身解除され、二人の体は地にひれ伏す。

「分かりましたか？今の貴女達のような半端なライダーでは私達の足元にも及ばないと」

アビスは仮面の奥でほくそ笑み、留めを刺すためにカードデッキに手を伸ばす。

二人の怪人もアビスの背後に着地し、ジリジリと歩み寄ってくる。

「く・・・」

「ちくしょう・・・」

霊夢は何とか起き上がろうとしたが、体が上手く動かない。

魔理沙は地面を強く叩いた。

このまま、奴らのいいようにされるのか。

自分達では何も出来ないのか。

二人が絶望したその時

再び、あのオーロラが現れた。

「敵の援軍か！？」

魔理沙はそう考えた。

ライダーがいなくなった今を狙って、敵が総力で来てもおかしくないからだ。

しかし、アビスは動揺していた。

「・・・誰だ？」

アビスは許可を得ずに勝手に幻想郷を襲った。

だから、援軍が来ることはありえない。

その時、アビスの目がオーロラの中の人影を捉えた。

「き、貴様等は！？」

【KAMEN RIDE】

【FINAL KAMEN RIDE】

「『『『変身』』』」

【DECADE】

【【DI・END】】

オーロラの中から現れたのは士、海東、蓮子、メリーの四人だった。

四人はそれぞれディケイド、ディエンド、ディケイドコンプリートフォーム、ディエンドコンプリートフォームに変身する。

「士、足引つ張ん無いでよ」

「お前がな」

蓮子の軽口にディケイドは短く答える。

「ベリー君、援護宜しく」

「はいはい」

メリーは海東に答えると、オウムヤミーとバードドーパントに狙撃した。

バードドーパントはまともに銃弾を喰らい、地面に倒れ込む。

オウムヤミーは銃を避け、空中へ飛び上がる。

オウムヤミーはディエンドCF目掛けて炎弾を打ち出す。

《ATTACKRIDE BRAST!》

ディエンドが強化された弾丸を発射し、炎弾を撃ち落として行く。
数発の弾丸がオウムヤミーに命中する。

バードドーパントがディエンド目掛けて突っ込んで行く。

《KAMENRIDE SUKARU》

ディエンドCFが仮面ライダースカルを召喚し、二人でバードドーパントを狙撃する。

バードドーパントも羽を打ち出して対抗する。

大量の弾丸は羽を撃ち落とし行き、やがてバードドーパントに命中し、地に落とす。

《KAMENRIDE G3-X》

ディエンドがカードをライドするとG3-Xが現れ、マシンガンを連射する。

オウムヤミーも、耐え切れずに地に落ちていく。

《HIBIKI KAMENRIDE アームド》

ディケイドCFがケータッチを操作し、ベルトに装着すると、ア

ムド響鬼が現れる。

《ADVENT》

アビスは契約モンスターを呼び出す。

「・・・はあっ！」

ディケイドCFとアームド響鬼が同時に剣を振る。

アームド響鬼の刃はモンスターを切り裂き、ディケイドCFの刃はアビスのデッキを砕く。

鎌田は変身が解けると、パラドキサアンデットに姿を変える。

「貴様ああ！！」パラドキサアンデットは迷うことなくディケイドCFに襲い掛かる。

その時、ディケイドが空中からパラドキサアンデットに切り掛かった。

《ATTACKRIDE SLASH》

マゼンタカラーの残像の残るライドブッカードで何回か切り付け、続けてパラドキサアンデットの体を蹴飛ばす。

《FINALATTACKRIDE DIDDIDIIDII-END》

海東とメリーは動きを揃えて照準を合わせる。

そしてトリガーを引き、強力なビームを発射した。

二人の放ったビームはそれぞれバードドーパントとオウムヤミィを撃ち抜いた。

《FINAL ATTACK RIDE DEDEDEDECADE》

士と蓮子は同時にカードを使い、跳び上がる。

パラドキサアンデットと二人の間に、ディケイドのマークと十人のライダーのマークが交互に現れる。

「はあああああ!!」

二人はマークを貫通していき、パラドキサアンデットは二人のキックに触れた瞬間爆発する。

「ぐああああああああ!!!!」

ディケイドはパツパツと手を叩き、変身を解く。

蓮子達も変身解除し、続いて行く。

霊夢と魔理沙は呆然と皆を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7045n/>

東方仮面郷-after

2011年4月20日12時37分発行